慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ゴンクール兄弟『ジェルヴェゼ夫人』(第一～三章) (翻訳)
Sub Title	Edmond et Jules de Goncourt, Madame Gervaisais (chapitres I-III), (traduction)
Author	山本, 武男(Yamamoto, Takeo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2019
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.69 (2019. 10) ,p.146(11)- 156(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	Traduction
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20191031-0146

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ゴンクール兄弟『ジェルヴェゼ夫人』

（第一～三章）（翻訳）

山本武男

訳者まえがき

ゴンクール兄弟が二人で共同執筆した最後の長編小説が『ジェルヴェゼ夫人』（一八六九年刊）である。自らの「過ち」を境に、罪の意識に苛まれるフランス上流階級の婦人が、幼い息子と共にローマに住み、自らの内面と向かい合う。カトリック信仰の中心地に身を置きながら、夫人はどのような形で、過去と、それが齎した現在と、自分との折り合いをつけるのか。物語は、美しいローマの風光のなかで穏やかに展開していくが、やがて夫人の罪の意識の隙に「魔の手」が伸びる。近現代の核家族が抱える脆弱さを鋭く突いた『ルネ・モプラン』同様、『ジェルヴェゼ夫人』は、ゴンクールの時代から今日に至る宗教や信仰の危機を先駆的に描いた、二十一世紀を生きる我々に警鐘を鳴らす名作である。

〔翻訳〕

然（さ）る夫人を偲んで

一

「家賃は四十スクーディで宜しいのかしら」

「左様でございます、奥様（シニョーラ）」

「それなら、フランスの貨幣に両替すれば二百フランですわね」

「二百フラン……」

外国から来た婦人に貸し物件のマンションを見せていたローマの女はそう漏らすと、頭の中で計算しているらしい仕草をした。「その通りでございます、二百フランになります。奥様（シニョーラ）、もっとよくご覧になられてくださいましな……」

そう言ってから、素早くショールを外して寝乱れたベッドの上に投げ出すと、部屋から部屋へ、きびきびと上下に上体を揺らしつつ歩き始め、「ご覧の通り……今朝出て行ったばかりで御座いまして……イギリス人の家族でしたが……綺麗にお使いくださらない方々で、あちらこちらに液体の染みが残っております……散らかった儘で御座いますが……片付ける暇がなかったものですから……」と家具付き貸間の大家（パドローナ）らしい能弁さで語った。

が、外国から来た婦人は、家主の話を聞いてはいなかった。幼児服を着ている子供の手を取り、窓の前に立ち止まり、スペイン広場やトリニタ・デイ・モンティ教会へと続く階段等、そこからの眺めをその子に見せていた

のである。そして「ピエール＝シャルル、ここに住みたい？」と尋ねた。

子供は返事をしなかったが、幸せそうに大きく見開かれた眼で母親の方を振り仰いだ。

「なんて綺麗なのでしょう！」貸主は、何と言わず美しいものを目の前にしたローマの人々にありがちな賛嘆の声を上げた。

この言葉を耳にするや、外国から来た婦人は暫しの間、息子をじっと見つめたが、そこには我が子の顔に認める美質に、接吻するかのようなあの母親らしい視線があった。

「ということは、この可愛らしいお口は、まさか、お話しが出来ないので御座いますか」とイタリア人の女が訊いた。

「この子は、年齢の割には発育が遅れておりますの」そう言うと外国から来た婦人は俄かに真顔になった。ちょっと間があった後、今度はつっけんどんに「それでは、ここに決めましょう、宜しいですわね……小さな控えの間があって、台所と使用人の部屋が踊り場の反対側に設えられているのも好ましいですし、それにこちらの連なった四部屋もわたくし、気に入りましたわ……」と続けた。

「左様で御座いますか、奥様……ねえ、私たち二人は奥の小部屋に引っ込んでいた方が宜しいんじゃないかしら……もう御用は澄んだでしょ、お母様」

そう言いながらローマの女は、肉は落ちているがとても美しい顔立ちをした、喪服姿で威厳に満ちて立っている老婦人の方へ振り向いた。この人は無言で、自らは判じ得ない言葉での会話に立ち会い、南の国の人らしい眼力で、内容に就いては凡その察しを付けている様子だった。

「では、話しは纏まりましたね……このマンションをお借りすることに決めますわ」

「結構で御座います、奥様、今年は値段もお安くなっておりますし……もう少しローマに外国人が多く来る年

だと、ここはもっと値の張る物件なんで御座いますのよ……」

「ねえ、この建物は静かかしら。物音はしない？　だって、さっき……ある住宅を見に行ったのですけれど……建物の間の路地に「音楽の先生（マエストロ・ディ・ムージカ）」という表示をお見かけしたものですから……」

「あら、ここは……ご覧の通り、一階には書店が御座いますが、曾て私の父が所有しておりました銅版複製所も付随しておりまして……で、その上の階がそれらを販売する店舗になっております……まあ現在、私たちはこの件に全く携わってはおりませんけれども……」

「わたくし、具合が思わしくないんですの、あまり……静かな場所が、適度な静寂が必要なんですわ」

「まあ！……奥様は、御体調が優れないので御座いますか？」ゆっくりとした口調でそう言う彼女の胸のうちには、ローマの女家主たちが共通して抱く肺の流行り病（はやり）に対する庶民的な恐怖心が瞬く間に芽生えていたが、この手の感情は、既にシャトーブリアンによって、ボーモン夫人の為に終（つい）の棲家を探していた時の回想の中で記されている。外国の女性として、自分の病について分かって貰えそうな一言を探しあぐねていたせいで、却って気高く簡潔な調子になり、

「御嬢さん、お取りあそばせ、もうお話は済みましたわね……こちらが最初の月の二百フランです。」と言ってからテーブルの上に現金を置いた。

「ここが本当に気に入りましたら、またご相談致しますわ」

「母が今、貸間ありの張り紙を外しに参ります」そう娘が言うと、ペン先を乾いたインク壺の澱（おり）に浸し、「領収書の宛名は如何致しましょう」と尋ねた。

外国から来た婦人は名刺を一枚差し出したが、そこには、

ジェルヴェゼ夫人

とあった。イタリア人の女は身を屈め、集中して名前を写し取ったが、顔を挙げる際、子供が母親の手袋をした手を裏返しにして、そのまま手の平の位置に口付けをするのを目に留めた。

「この子、好かれるでしょう」

「あら、そんなことないわ、母親にだけよ……」そう夫人は溜息まじりに答えた。

「私どもが居住者のパスポートを警察に提出する義務があることはご存知かと思いますが……」

「わたくしの物はホテルにお預けしてありますわ。明日、入居の際にお渡しすることに致します……」

「朝食はこちらでご用意するよう手配致しますか」

「いいえ、結構ですわ……二三日したら、料理を作ってくれるような使用人を雇う積りでおりますから。それではお嬢さんも、お母様も、また明日……いらっしゃい、ピエール＝シャルル……」

それから、部屋の奥で小さくなり、故郷を遠く離れた寂しさに胸がいっぱいで、今にも泣き出しそうなブルゴーニュ出身の小間使いの娘に向かって、

「ほら、オノリーヌ！　あなた、わたくしたち、ここに入居することになったから、また戻ってくるからね」と告げた。

ドアを前にした夫人のところへ先刻（さっき）のイタリア人の女が小走りに駆けて来て「奥様、忘れておりましたわ」と声を掛けた。「お靴磨きのことに就いてお知らせしなければなりませんでした……奥様の小間使いさんが担当されるのでなければの話なのですが……」

「うちの小間使いがするのは、寝台を整えたりすることくらいですけれど……」

「それでは、一足につき二バイヨッキになっております……心付けとしてうちの下女（セルヴァ）にお渡しください」
「分かりましたわ。それなら二バイヨッキ、お渡し致します……」
そう答えたが、ローマでの貧しい者への心付けの安さにジェルヴェゼ夫人は思わず微笑んだ。

二

その晩、ホテル・ミネルヴァのレストランのテーブルは満席で、生真面目な観光客がまだ中身が運ばれて来ていないスープ皿を前に、ガイドブックを読んでいる姿が散見された。
「違います……わたくしには肉のスープを……それから息子にも」肉抜きのポタージュを運んで来たウェーターにそう言ったが、そもそもジェルヴェゼ夫人がそうと知らずに着席したのは肉なしの料理が出されるテーブルだった。
夫人の隣で立ったまま食前の祈り（ベネディチーテ）を唱えている最中だった赤ら顔の聖職者は、この要求を耳にすると、ちらと彼女の方を見たが、僅かの後には目を伏せ、椅子を引いて座った。力天使、殉教者、キリスト教史に残る女傑らの石膏像が立つ巨大な食堂内では、モザイク模様に塗られた壁に向かって、「永遠の都」を訪れた多種多様な人々が食事を取っていた。様々な土地からの賓客、カトリック信者、聖職者のフロックコートを身に纏った一般信徒、教会内の序列を上から下まで見せる様に立場に合わせ色々な服装をしている司祭、紫色の縁なし帽を被った司教、あちらにもこちらにもいる安いワインの産地から来た訛りの強い主任司祭、敬虔かつ物見高い上流階級の老婦人の巡礼に付き添う痩せた大修道院長、妻に贅沢旅行をさせている成金の商人、聖女の名を言い間違えるずんぐりした実業家とそれを修道院で習いたての知識で大きな声を出して訂正する娘、隣の人に、温暖な地方の

ワインが如何にローマでは「油状」になり易いかを博識をもって説明する外交販売員、そうしてそんな彼らの背景にぼんやりと広がるのは特徴も名前も分からない、国際色豊かな行きずりの沢山の人々で、ホテル生活や食事の際の相席がきっかけで近付きになり、打ち解けて会話を交わしている。

こう云った人々の中にあって、テーブルの一端で一際目立っていたのが、老いた聖職者にありがちな、あの折り目正しく優美な白い法服に身を包んだ身分宜しき騎士章の佩用者で、上から見下ろすようにして食客たちを観察していた。そして社交人士らしい身振りを交えて、古代のヘアバンドを思い出させる、燃える様な色のリボンで髪を結わえたイタリア人女性の耳元に何やら語り掛けていた。

そうして夕食が進み、食欲が満たされるに従って、あちらこちらで臨席した者同士の会話が混ざり合って聞こえ始め、それが全体へと広がって行った。そのとき、定食用のテーブルで、フランス人の場違いな言動が巻き起こり、色めき立った。自国の思考、偏見、製品などをもとに、自分よがりの視点で比較し、よその国の土地にいながら、あちらこちらでフランスのことを思い出したがり、自分たちとは違う振る舞いをする権利を、よその国の国民にまったく認めようとしないのである。甚だしい無知でありながら学者ぶった言葉遣いで、よその国の風俗、慣習、制度を批判するのだった。コップに注がれたカフェ・オ・レを出された殿方たちからは、野蛮な国に上陸した文明人としての苦情が持ちあがった。ロースト・チキンの大きさが小さいと言って、だから政治も駄目なんだと言う者がいたかと思えば、禿げ頭の男が、聖ペテロが囚われていた監獄ぐらい毎朝掃除すべきだと言って建物を管理する役人を非難する始末だった。

ジェルヴェゼ夫人は、それがミネルヴァ・ホテルに於ける最後の晩餐だと思うと嬉しかった。周囲の愚にもつかぬ五月蠅い話し声のどれもに、うんざりすると言うよりは、もう気が滅入るほどだったからである。かくも声高な愚かしい発言をそこで耳にしていると、吐き気がしてくる様に感じた。彼女のフランス女性としての、パリ

ジェンヌとしての自尊心は、同国人の口から吐き出されるこれらの馬鹿げた言葉に傷付き、さらには地上で最も神への信仰心熱き民の国の、世界でこの上なく偉大な都市の光景に触発され、皮肉っぽい奇妙な特権意識によって駆り立てられた辺り構わぬ粗野振りに、これほど近いところから、またこれ以上はないと思われるほど下品な表現で接したことで、その内面には苦痛にも似た苛立ちと同時に屈辱感が生まれていた。

「オレンジを一つお取りなさい、そしたら参りましょ」デザートを目前にして我慢の限界を感じて遂に息子にそう言ったが、それは隣に座っていた食前の祈りに臨む聖職者の態度に嫌気がさしており、夕食を前に元気を回復した彼が肘を彼女の方に進め、ワインのメニューで自身の肩をぽんぽんと叩いていたからであった。

彼女は再び大階段を昇った。管理人室に寄り添う様にしてそこから動かず、通り過ぎる人々に「羅針盤」紙を差し出すカプチン会修道士の傍、すれすれのところを通り過ぎた。それから長い廊下を通ると、そこここの角に高位聖職者の旅行鞄が目に付き、赤いモロッコ皮製の、黄金の浮き出し模様の付いた、銀製品入れの箱を思わせたが、自室に到着すると息子と一緒にそこに閉じ籠った。

日が沈みつつあった。斜陽を浴びていると、宵闇迫る一日の終り、太陽が去りゆく瞬間、女の性が時に抗えない悲しい気持ちに、再びなった。僅かずつ婦人は、影への恐れ、宵闇への怯えが病人に与える、あの手の夢想的にして、衝動的に怖がる憂鬱の虜になった。息子を膝に乗せ、揺らし始め、眠りに就き始めた子供を胸に抱き締め、口を頭に付け、髪の毛の中で囁きつつシューマンの子守歌を歌った。

小間使いは、婦人が寝るのを手伝いつつ、「アンドラルさんが毎晩飲む様に勧めていた水薬は如何なさいますか」と訊いた。

「そうでしたわね！　オノリーヌ、宜しければ……飲ませて頂戴、飲めば屹度、ホテル・ミネルヴァの蚤に噛まれるのを感じなくて済むわ」

三

翌日、ジェルヴェゼ夫人は、借りたアパルトマンに入居した。ステップの上で飛び跳ねる子供の背後で、夫人は小さな大理石の階段を昇って行ったが、その白と黒のタイルには植木鉢の花越しに陽が指し入ることで透かし彫りの様に見える大窓の影が濃く落ちていた。荷物運びの人夫達の前で戸を閉めると、田舎の宿屋や、ホテル、簡易宿舎から出た時に誰もが感じる、あの解放の喜びを感じた。大型荷物ケースを開けて見たり、座ったり、身なりを整えたり、これから長い間、自分の家で得られる所有の感覚や心地よさを取り戻していく室内にいるのだと感じたりすることに、ちょっとした幸福感に浸った。

それは、どこにでもある家具付きのアパルトマンで、ローマ市が森林監督官らの為に借り上げたりする物件なのだが、家具にはローマらしさが見られ、特にカロッツェ通りとスペイン広場の角の大きな部屋がその特徴を備えていた。白く塗られた天井は、四つの格子で出来ていて、各々の枠の中には、青と赤の網目で出来た、細紐の先に花籠のぶら下がった図柄の優美なアラベスク模様を収めていた。壁紙は、青地に灰色一色の装飾模様が絡み合っていた。寄木張りの床は、赤、黄、黒、白のトルコ絨毯の縁の下に見えなくなっていた。キャラコのカーテンは外気に揺れて、フリンジの付いたダマスク織りの垂れ飾りの下、窓辺で翻っていた。時代遅れの堅苦しいウォールナットの幾つかの小さなソファは、壁に向けて置かれていたが、その黒い木製の椅子の短い脚は曲線を描き、狭い背凭れには、中央の輪の中に竪琴を奏でるミューズが見えるが、寄木細工の粗悪な円形浮彫と似た様なものであった。同じ様式の数脚の椅子は、傷んだ三脚の丸テーブルの周囲に集まり、壁に取り付けられた黄色い小机は、金色の金属で出来た女性の頭を持つヘルメス柱像が支えていた。

カロッツェ通りの側には、白大理石の暖炉があった。その幅の狭いマントルピースの上で、黄金色(こがねいろ)のグリュプスの両肢に乗った鏡は、三つの薔薇の木枠に納まった三枚組で立てられ、その上部には銅製の数本の小柱が支える、ささやかな水平飾りが付いている。収納箱の扉を思い出させる、土地特有の鏡である。

正面には、ジェルヴェゼ夫人がつい前日に、設置するよう送って来させたピアノが、蓋を空けた状態で鍵盤を見せ、その上方には基布に黒で刺繍した歴代ローマ教皇の年号の入った大きな一覧表が掛かっており、幾つかの鍵と教皇冠で装飾された額縁に入っていたが、それは家主の娘の信心深い労作で、傍には、クロード・ロランの風景画の版画が、パルボーニの署名入りで斜めに傾いて掛かっていた。

そして、部屋中至る所、暖炉の上、小机(コンソールテーブル)の上、丸テーブルの上には、実に雑多な細々した物が置かれ、所狭しと混ざり合っており、オベリスクのミニチュア、大理石材の試供品、雪花石膏製の盃、青銅の小立像を乗せた小円柱の列、カノーヴァのライオン像のテラコッタの複製、エトルリア風の壺を乗せた飾り棚(ダンケルク)等が見られるが、立派な外観の細々(こまごま)とした置物のこの様な堆積同様、箪笥の上には、家主の年増の娘が集めた玩具らしきものや、ローマのブルジョワジーの守護神たちの聖遺物を思わせる品々が並んでいる。そんな室内にあって、ジェルヴェゼ夫人はやがて、旅の疲れの名残と共に倒れる様に座った椅子から立って、また別の椅子へと移動し、小間使いの方に身を乗り出した儘、あれやこれやを移動させたり、順序を変えさせたりするよう指示を出していた。その間、子供が、何でも触ってみたくなる年頃に相応しく、その可愛い指の間に摑んで見てみたい置物を、自分の背丈よりも手を上に掲げてしつこい身振りで示してくる時だけ、重い腰を上げていた。

最後は、夫人は部屋の角に行って休んだが、そこの影が濃くなっている辺りに「キリストの変容」の版画の試し刷りが掛かっていて、その前では、二つの窓からの光が絨毯の上で十字に交差していた。そこは居心地が良く、夫人は落ち着ける隅を見つけたと感じ、女なら選ばずにはいられないこの愛しい場所で暮らすことで、そこをキ

リスト教への帰依の場所と決め、そこで幸福な気持ちで穏やかに自分自身と向き合い、読書し、書き物をし、瞑想した。ソファの上の幾つもの小さなクッションを窪ませ乍ら、それらを周囲に集めて体を支えつつ、夫人はオノリーヌに、自分の前にテーブルを持って来るよう、また普段使っている吸い取り紙の上に、彼女の本を置くように命じた。頭上には金色と白の柳の細枝で編まれた籠が掛けられており、夫人はそれを満たす花を探しにも遣らせた。それから、扉を開けば可愛い我が子に愛情の籠った視線を注いで、眠る姿も見守れるように、息子の寝台を隣の部屋に設置させた時には、自分が熱望していたこと、自身を包み込むもの、明るい光と、そして陽気で楽しいこちらの部屋のお陰で、夫人の身振りは満足気だったが、それは、共感できる形象、調和した周囲の壁、苦しみから解放してくれそうなその住まいの幸福な雰囲気が、ほんの僅かな悲しみの種にも滅入らせられる、彼女の病的で神経質な性質に作用したからなのであった。

（つづく）

翻訳は、以下に拠った。Edmond et Jules de Goncourt, *Madame Gervaisais*, éd. Marc Fumaroli, Gallimard, coll. Folio, 1982, p. 66–76.